

適応、受容、土着、習合

近 藤 誠

奨励者紹介[こんどう・まこと]

日本キリスト教団神戸多聞教会牧師

わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。弱い人に対しては、弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。

(コリントの信徒への手紙一 9章19—23節)

宣教師として

私は2016年の4月まで、4年半にわたってアメリカに滞在しておりました。私の所属している日本キリスト教団から、サンフランシスコにあるパイン合同メソジスト教会というところへ、宣教師として派遣されたのです。皆さんは宣教師についてどんなイメージをおもちでしょうか。日本に最初にキリスト教をもたらしたイエズス会のフランシスコ・ザビエルだったり、あるいは海外からやってきた宣教師が日本語に苦労しながらキリスト教を伝えようとしている姿が思い浮かぶかもしれません。ところが私の場合、外国の人たちを相手に現地の言葉でキリスト教を広めるというような、一般的なイメージの宣教師ではありませんでした。

アメリカは多様な宗教、文化を内包しているとは言え、キリスト教文化圏です。どうしてキリスト教人口の少ない日本から、私のような英語も不得意な日本人宣教師が送られたのかと言いますと、パイン教会には日本語の礼拝があるからです。1886年に日本人によって設立されたこの教会には、現在は英語部という英語を話すグループと、日語部という日本語を話すグループがあるのです。それで私は、一般的なイメージの宣教師ではなく、日語部の牧師として派遣されたというのが本当のところでした。

日本キリスト教団からの海外派遣宣教師の多くは、海外の日本人教会の牧師として仕えているのが現状で、私も同じように、日本語での礼拝を大切にしている人たちを中心に、駐在員や研究者、留学生、それに国際結婚をして海外に住んでいる日本人を対象にした牧会をしていました。もちろんそれ以外の人々とも良い出会いがありましたし、「宣教に携わる者」という意味では宣教師だったかもしれません。私は渡米前には日本の教会で牧師を7年経験していましたが、こうして宣教師という肩書きをもらってから改めて、「宣教」とは何かということを考えるようになったのでした。

カリフォルニア州北部に位置するサンフランシスコは太平洋に面しているのですが、私はその海岸を散歩していた時、自分は飛行機であつという間に海を越えてきたけれど、およそ150年前からこれまでに日本へ派遣されたプロテスタントの宣教師たちが、どのような思いでこの太平洋を渡ったのだろうと想像しました。私も同志社の卒業生の一人ですが、同志社設立にかかわった宣教師たちや新島襄先生が神の導きを信じてこの広い海を往来されてきたことを考えると、何だか胸が熱くなるような思いがしたものです。

日本の宣教を考える

ザビエル来日から禁教令が布かれた時代を含めて468年ですが、数えきれないほどの宣教師が日本で活躍しました。それらを一つひとつ紹介する時間はありませんが、彼らの熱心な働きの結果、幼児教育、女子教育、医療福祉、人権、そして社会運動など、日本社会のあらゆる分野に大きな影響を与え、それは今でも連綿と続いています。ただし、多くの学校や施設で、創立当初にはあったはずの基督教の理念が弱くなったり、ほとんど消え去ってしまっているのを見たり聞いたりすると、残念な気持ちになることもあります。同志社はどうでしょう。実際、日本のキリスト教人口は、横ばいどころか減少の一途を辿っています。ある資料によれば、正教会、カトリック、プロテスタントすべて合わせておよそ100万人となっていますが、毎週コンスタントに礼拝に出席しているようなクリスチャンということになれば、その内の3割にも満たないかもしれないという手応えしかありません。ザビエルの時代、明治維新、そして第二次世界大戦後に起こった基督教ブームも、それほど長く続くものではありませんでした。日本の基督教宣教は失敗したのだという厳しい評価もあります。

数字だけで言えば、今のところうまくいっていないように見えます。ネガティブな面を挙げれば切りがありません。カルト宗教による犯罪や世界で起きている紛争、あるいはテロのニュースは、宗教そのものに対する信頼を失わせ、基督教のみならず日本の既成宗教にも影を落としています。せいぜい観光地や、いわゆるパワースポットに人が集まる程度で、それらも本質的な信仰や信心とはかけ離れている印象です。キリストの誕生を祝わないクリスマスや、キリストの復活を祝わないイースターも、何とも複雑な気持ちになります。そのうち聖霊の降らないペンテコステも、うまくアレンジされてしまうかもしれません。

それでも私は、日本の人々がいろいろな宗教行事や伝統文化を取り入れて、それなりに楽しむということを全否定する必要はないと思っています。むしろ、本来は教会が担うべき宣教が、別の形で先行して広がっていると前向きに捉えてもよいかもしれません。東西にある某アミューズメントパークがイースターのイベントを始めたのはここ数年のことです。ビジネスに利用されているということは否めませんし、キリストが卵やウサギに取って代わられているのも事実ですが、せめて「イースターとは基督教のお祝い」であるということぐらいは次第に浸透していくことを期待しています。

そこから先、クリスマスやイースターの本当の意味、そしてその喜びが何なのかということを福音として伝え直すのは、教会の仕事だと思います。ただし十分気をつけなくてはならないのは、今さら西洋式の基督教を日本社会や日本人に押し付けようとしても無理があるということです。かつて行われていたような、上から目線で、野蛮な人々にもっと優れた神を与えてやろうというような方法は通用しません。しかしそれでも、基督教の最も基本的な隣人愛を含むさまざまな教えは、いつの時代にも古くなることはないと考え

えています。つまり、現代社会を生きる人々の心に寄り添い、悲しみや痛み、苦しみの中にある人々に、再び立ち上がる力と、生き抜く知恵を伝えていくことができるかどうかということが、今日もまた問われているのだと思います。

福音を携えて

世界有数の経済大国となった日本は、確かに物質的豊かさは手に入れました。けれども、そのようなこの世的なものには浮き沈みがつきもので、いつまでも続きません。誰もが気づいているとおり、日本社会の中で経済格差が生まれ、貧富の差が固定化しています。また、心の病を抱えている人たちが増えているというのは、牧師という仕事をしていて実感としてあります。自ら命を絶つ人が多いのも特徴です。人と人との顔の見える繋がりが失われていて、孤独な人が増えています。国がどこことなく右傾化していく中で、人権を脅かすような排他的な思想が勢力を拡大しているように感じます。

私は牧師ですが、キリスト教を信じて洗礼を受ければ、ただちにそういう問題から解放されるなどと言うことはできません。なんだか八方塞がりのような気がして、何をどうしてよいかわからないというのが正直な気持ちでもあります。実際のところ、人を救うほどの潤沢な資金はないし、病気を治す医者でもないのです。私たちの間に横たわっているさまざまな課題は複雑に絡みあっていて、容易に解決できるような問題でもありません。それでももし私あるいは教会、そして皆さんができることがあるとするならば、共に泣き、共に悩み、悲しみ、あるいは共に喜ぶことです。むしろ、それが出発点であり、第一歩なのだと思います。

そして、かつてこの世の現実の中で、私たちと同じ苦しみを味わい尽くしてくださったお方こそ、福音書に記されているイエスその人だと思うのです。群衆に罵られ、弟子たちに裏切られ、十字架上では神にも見捨てられたようにして亡くなっていかれたのがイエスです。しかしイエスの十字架の出来事は死で終わらなかった。それは、絶望的に見える私たちの未来にも希望が残されていることを表しています。イエスは生前、貧しい者、病をもつ者、呪われた者、律法によって定められた罪びとに寄り添われました。群衆を軍隊にしてローマ帝国に対抗するのではなく、迷い出た一匹の羊を探し求められるお方です。一見効率が悪く、神の子としてはあまりにも非力なイエスが、地に落ちた一粒の麦となってやがて大いなる実を結ぶことになったのだと聖書は教えているのです。

私は福音書に描かれたイエスの姿に、日本の基督教のあり方と将来への希望を見いだしたいと思うのです。日本社会の中で、取るに足りない存在の基督教、あるいは教会が、味のする「地の塩」としてあり続けることができるかがますます問われてくるに違いありません。そしてもう一つ、先ほど読んでいただいた聖書箇所には、パウロの宣教師としての姿勢が描かれていました。パウロという人は、ユダヤ人ではない外国人に向けてキリストの教えを説いた最初の宣教師と言ってよいと思います。彼の言葉をそのまま借りるならば、「日本人に対しては日本人のようになる」ことがヒントとなります。誤解を恐れずに言うならば、日本の人々を基督教にどうにかして適応させるのではなく、教会が日本の文化や風土に適応し、そして受容されていくこと、そしてそこから新しい芽が生まれ、自生していくというプロセスの中でこそ、「外国の宗教」という枠組みを少しずつ乗り越えることができるのだと考えています。そしてキリスト教会が、日本のみならず、世界のどこにあってもその地の隣人となり、社会の中で低くされた人々や悲

しみの中にある人々と共に歩み、立ち続けていくことができるように、宣教師を経験した者として祈っています。

2017年5月24日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録